

大晦日から元旦へ

山科本願寺の元旦会

蓮如上人の時代、勸修寺村の道德が、当時京都山科にあった本願寺に赴き、上人に新年の挨拶をした、という記録が残っています。

道德は、おそらく元旦のお勤めにも参拝したのでしょう。その頃の本願寺御影堂の元旦のお勤めは、『正信偈』です。和讃は、一年の最初だから「弥陀成仏」から始まるのかと思いきや、それはすでに大晦日にお勤め済みで、元旦は「道光明朗」からの六首でした。

ある特別な日の前日を重視するという考え方は、洋の東西を問いません。キリスト教なら、クリスマスの前夜、イヴが盛り上がりやすね。仏教では、ご命日前日の午後のお勤めを逮夜たいやと言って、大切にしています。“特別な日”は、もう前日から始まっているのです。

お念仏とともに迎える大晦日、お正月

ところが現代は、大晦日と元旦では意識がすっかり変わる、という風潮があるのではないのでしょうか。皆さんのご家庭では、年末にお仏壇を大掃除し、お寺の除夜の鐘を聞いて、一年を終えられることでしょうか。でも年が明けると、元旦のお勤めが行われているお寺を素通りして、神社に初詣。これって、なんだかヘンじゃありませんか。

蓮如上人は、新年の挨拶に赴いた道德に、「念仏申さるべし」と仰せになりました。大晦日も、元旦も、お仏壇の前で、お寺で、お念仏申させていただけます。

みほとけとともに

鐘の声

過ぎ行く時の速さを実感する年の瀬に、除夜の鐘が響きます。鐘の響きといえば、「祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり」の一節が思い浮かびます。お釈迦さまの

説法の間、祇園精舎の鐘が、“私たちはみな、移り変わる無常の渦中かちゅうです”と、鳴り響いているというのです。

大晦日の明くる日は元日です。昔は数え年なので、この日は誕生日でもありました。賑わう京の町中を、トンチで有名な一休さんは、杖の先に髑髏しやくろうを刺し「ご用心ご用心」と、叫び歩いたそうです。新年を迎えることは、老いゆくことでもあり、無常である身を忘れるなど釘をさされました。

念仏を慶ぶ

「新年おめでとうございます」と祝いますが、私にとってめでたいとは何でしょう。

阿弥陀さまは常に私をごらんになり、「必ず救うぞ、われにまかせよ」と呼びかけておられます。そして、私たちは南無阿弥陀仏というお念仏によって、そのあたたかいお慈悲を知るのです。人生は苦難の連続ですが、いつも阿弥陀さまとともに、力強く日々を歩ませて頂くのです。他と比べて幸



せという、不安定なよろこびではなく、決して変わることはないお念仏に生きることは、この上ないよろこびとなります。

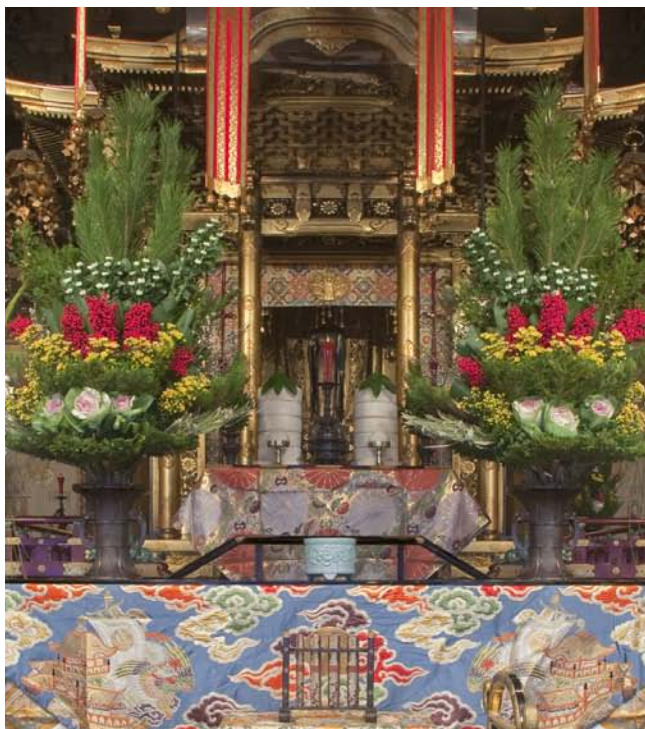
無常^{ほんろう}に翻弄される私が、常に変わらぬお念仏にあわせていただいていることほど、めでたいことはありません。



私の来し方・行く末を貫いて、お育て下さいます阿弥陀さまにご挨拶させて頂き、新年の出発をいたしましょう。

「あらたまの 年のはじめは祝（いわう）とも
南無阿弥陀仏の ころわするな」

— 蓮如上人



本願寺阿弥陀堂 修正会のお飾り

連絡先

©監修 本願寺仏教音楽・儀礼研究所

